

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室

電話(03)26117079

振替 東京0158431

労金 東京労金本店 No.50234

購読料 月額 300円 6カ月前納制

〈もくじ〉

◇岩井章氏に聞く◇

「労働運動統一懇談会」運動のめざすもの……………2

ふぎすさぶ「合理化」の嵐……………4

——鉄・電機にみる「合理化」の実態——

キユーバの社会主義……………7

——第十一回世界青年学生祭典報告(一)——

◇投稿◇

百万党「構想」を考える……………10

■マルクス・レーニン主義とは何か②■

日本社会党の性格と任務……………13

——日本革命と社会党(四)——

■号外・好評発売中■

社会党「百万党建設の基本構想」批判

定価 四〇〇円

# 旬刊 社会通信

NO. 33

一九七八年十月一日

一九七八年十月一日発行

(毎月一日・十一日・二十三日三回発行)

## ◇岩井 章氏に聞く◇

## 「労働運動統一懇談会」運動のめざすもの

岩井章氏が「労働運動統一懇談会」運動を提唱したことは、『社会通信』第二八号（八月一日付）ですでに紹介した。この運動で岩井氏が何をめざそうとしているのか。岩井氏に直接聞いた。（編集部）

## 労働運動への「危機」感が底流にある

問 七月二四日、岩井さんは「労働運動統一懇談会運動」を提唱されたが、そのねらいは……

岩井 「よびかけ」文をみてもらえばよくわかるんだ。だけどね、その前に、この「運動」のポイントを話しておけば、討議に参加した連中が、労働運動、大衆運動に危機意識、あるいは危機感を共通してもっていることだ。「このままじゃいけない」とね。

ただ、「このままでもいい」という人もいないわけじゃない。これが問題なんだよね。もう一つは、少数派主義のゆきずまりということだな。これにはちょっと説明を要するんだが、これまでやむをえず少数のグループで活動をせざるをえなかった人びとがいるね。今までは、彼らのなかに少数派主義でいいんだというのがあったんだ。ところが討論を重ねていくうちに、状況がここまでくれば、少数派主義ではだめだ、労働運動は大衆的に多数を獲得しなければというように変わってきてるんだ。これが「よびかけ」の前提だといえるな。

問 人によっては、全電通の「労働社会問題研究センター」に対抗するもの、とのみかたもあるが。

岩井 そんなことをいう人がいるの。「よびかけにあたって」であきらかだと思っただが、去年（一九七七年）の六月四日に第一回の準備会をやってるんだよね。これには地方の職場の人たちも招いているんだ。それから何回か議論して、こういう文章になった。要約してあるが、いいたいことはすべてつくしていると思うよ。

## 職場・地域の仲間をあげましたい

問 第一項は、敵独占の攻撃の手段と方法。独占の状況が書かれている。

岩井 「労働運動の解体をめざして」、「軍事大国」と特徴をあらわしたんだ。「軍国主義」でもいいが、日本はそれだけの力はもてないだろうからね。

問 第二項は労働運動の状況についてですね。

岩井 そう、「効果的な反撃ができていない」、「労資協調の流れに流されている」、「一部民間労組の右より結集、公労協のなかにも一部亀裂がはじめている」ということね。

問 他方、職場や地域の仲間はがんばっている。

岩井 それらの部分をはげましたいんだよね。それが「労働運動統一懇談会」のねらいということになるな。第三項でつきてると思うんだが、私は、それぞれの党派の党派性を

否定しようとは思わないんだ。かさなる部分、オーバーラップする部分を拡大する。そしてたがいに統一してたかう部分をふやしていきたいんだよね。

問 こういう「運動」ははじめての提起ですね。

岩井 だから最初はとまどいがあると思うよ。かんたんじゃない。だけど、準備会ではそれがやれてきたわけだからね。

問 第五項では当面何をすることが書かれている。

### 反独占がスローガン

岩井 第一に春闘の階級的再構築、第二に大衆路線の確立、第三に全国的な支援・連帯の拡大ね。

問 この「よびかけ」をみて、岩井さんが新しい組織づくりをはじめたのでは？と、考える人もいると思うが。

岩井 それは早トチリだな。一党一派をつくることを提起しているわけではない。「よびかけ」に賛同してくれる人たちが、どんな場所でも討論して運動を強めていく、その努力をしてみたいということだ。

現役幹部の人たちにもすではなしをして、理解をふかめてもらっている。状況の進展にともない幹部のなかからも強める努力をしよう。ようするに、「上」からも「下」からも、総結集しようじゃないか。そして討論の輪をひろげようということだ。

問 つまり、反独占、反J.C路線を旗印に、階級的労働運動構築のための討論の場をつくろう、そして討論のかさなり合う部分からおたがいに自分の持ち場が努力し合おうということか。

岩井 そうそう。いたるところで組織したいということだ。研究と討論の場をね。

問 一部の報道では、九月中に組織づくりをすると伝えられているが。

岩井 そのようにいった覚えはないな。もしそうした報道があるとすれば、それは正しくない。

### ねらいは階級的労働運動をつよめること

問 今後、どのように進めるつもりか。

岩井 これまでもいくども討論をやっているから、動きをみたらうえて来月中にでも話し合いをやりたい。準備会的なものをつみ重ね、動向を検討し、仲間の手をさしのべ、ひろげていくことだろうな。

中央では、これまで一年以上の経験があるわけだから、研究会、討論会をつうじて一歩、二歩中味に入る。そして、労働運動についての提言、よびかけの努力を強めることはしたい。

問 提言、よびかけの範囲は、総評、同盟、J.C労働者にこだわらないということか。

岩井 そうだ。ねらいは階級的労働運動をつよめることだからね。

問 提唱への反響はどうか。

岩井 「よびかけ」を送ってくれとの要請はずいぶん多い。直接、家に電話かけてきた人もいるよ、「ガンバレ」ってね(笑)。

## ふきすたぶ「合理化」の嵐

—— 鉄・電機にみる「合理化」の実態 ——

エンゲルスは、『資本論』第一巻、第二三章『資本主義的蓄積の一般的法則』を要約してつぎのようにのべている。

「資本主義的生産方法は、そもその起源に内包しているこの矛盾（生産方法の社会化と私的所有の矛盾のこと・筆者）を、二つの現象形態にあらわしながらすすみ、フリーエの発見したかの「悪循環」を描き、そこからのがれ出ることができない。ただ、フリーエが当時まだ看取できなかったことは、この循環は次第に縮小しないということ、その運動はむしろ螺旋状であるということ、そしてそれは惑星のように、最後には中心と衝突して終末を告げねばならぬということであった。大多数の人間をますますプロレタリアに変えるものは生産の社会的無政府性という推進力であり、しかもまた、結局においてその生産の無政府性を廃止するものもプロレタリア大衆なのである。社会的生産における無政府性という推進力、これがすべての産業資本家に、大工業において機械をどこまでも改良することを命じ、その必要に応じて各産業資本家は彼の機械をますます改良する、そうしなければ彼らは没落するしかないからである。それだから、機械の改良とは、とりもなおさず人間労働の過剰化である。このように、機械の採用とその増加が、少数の機械労働者による数百万の手工労働者の駆逐をいみするならば、機械の改良はますます機械労働者そのものの駆逐をいみする。そして結局において、資本の平均的な雇用需要を超過する多数の待命賃金労働者を作り出す、これは、わたくしが一八四五年に完全な産業予備軍とよんだものであって、それは、産業界が多忙な時期には自由に利用でき、それに必ずつづく恐慌のときには街頭へほうりだされる労働者である、それは、労働者階級の資本との生存闘争において、いつも彼らの足にまつわる錘であり、賃金を資本の要求にあうような低い水準に引下げる役目をする調節器である。これを要するに、機械は、マルクスの言葉をかりていえば、労働者階級に対する資本の最も有力な武器となる、すなわち、それによって労働手段は絶えず労働者の手から生活手段を奪い、労働者自身が生産した生産物は労働者を奴隷とするための道具となるのである。こうして、労働手段の節約は、さしあたりにおいてただちに労働力の仮借なき浪費であり、労働機能の正常な条件の掠奪なのである、そして機械、すなわち『労働時間を短縮する最も強力な手段は、労働者とその家族の全生活時間を、資本の価値増殖に自由に使用しうる労働時間にかえる最も確実な手段となるのである』。このようにして、ある一人の過度の労働が他人の失業の前提となり、また、消費者を求めて全地球を駆けめぐる大工業は、国内大衆の消費を飢餓の最低限にまで制限し、これによって自国の国内市場を破壊するのである。『相対的過剰人口、すなわち産業予備軍を、つねに資本蓄積の範囲と精

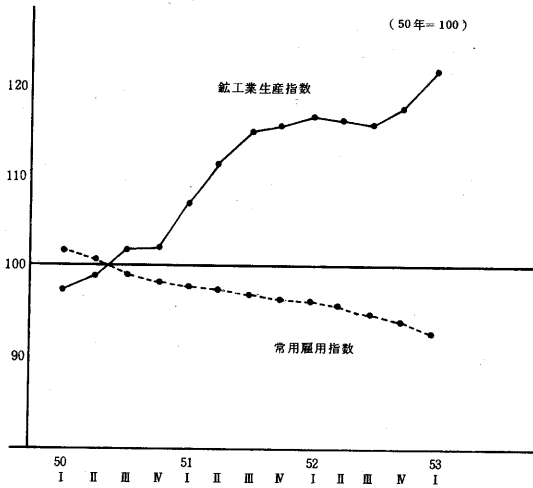
力とに均衡させる法則は、ヘーファイストスのくさびがプロメーティスを岩に釘づけしたよりも、もっと固く、労働者を資本に縛りつける。それは資本の蓄積があればそれに照応して貧困の蓄積があるということだ。だから、一方の極における富の蓄積があれば、同時に反対の極、すなわち、彼自身の生産物を資本として生産する階級の側には、貧困、労苦、奴隷状態、無知、野獣化、道徳的墮落の蓄積がある』（マルクス『資本論』六七―一ページ〔岩波文庫版第一巻第四分冊一四九ページ〕）ということだ。これに対して、資本主義的生産方法はそのままにして、これとちがった生産物の分配方法は何かないものかなどというのは、電極を電池に結びつけておいて、それが水を分解し、陽極には酸素が、陰極には水素が集まるのをやめさせる方法がないかという類である」（『空想から科学へ』、岩波文庫版、七五―七六頁）。

ここに、今日、運動上でわれわれが考えなければならぬ理論的問題のすべてが語られている。

二

ここでは、資本主義的生産方法のもとにおける、生産手段（機械）の改良は労働者階級に何をもたらしているかにしぼってみたい。

第1図 常用雇用指数（製造業）及び  
鉱工業生産指数の推移比較



第2図 電機大手14社の業種別減員比較

業種	社数	ピーク時従業員数(人)	53年3月従業員数(人)	減量(人)	減率(%)
総合	4	252,054	200,557	51,497	20.4
重電	2	13,120	10,650	2,470	18.8
通信	3	85,542	77,433	8,109	9.5
家電	5	92,799	66,669	26,130	28.2
合計	14	443,515	355,309	88,206	19.9

右掲の図は、『電機労連』（一九七八・八・一七）からとったものである。第一図は、常用雇用指数（製造業）及び鉱工業生産指数の推移比較であり、第二図は、電機大手一四社中の業種別減員比較、をあらわしたものである。

この図を電機労連は次のように分析している。

「今回の景気回復のきわだった特徴は、雇用面での回復がいちじるしく遅れ、未だに回復のきざしすらみられないことです。第一図にみられるように、生産活動は五〇年を基準として二四％強回復してきていますが、常用雇用指数は依然として五〇年の水準を下回ったままで生産活動とは対照的な動きを示しています。具体的には失業者数がこの六月でも

一・二六万人と高水準を維持し、この結果失業率（季調済）は二・四％に達し、これは昭和三四年以来一九年ぶりの高い記録で深刻化する雇用情勢を直接反映しています。……このように、企業レベルにおいては人べらしが常態化し、好況業種における生産拡大も不安定雇用と時間外労働の拡大で補う形の雇用調整メカニズムが働き、現在の景気の回復はその上でマクロ的に進行しているもので、この結果労働生産性がいちじるしく上昇し、これは好・不況をとわずあらゆる産業において高度成長期に匹敵する勢いで上昇し続けています」。

昭和四八年以後、労働生産性は飛躍的に高まり、電機大手に例をとれば八万八、二〇六人の労働者がクビ切られている。『電機労連』は、これをスマートに分析している。たとえば「雇用調整メカニズムが働き」と、いうように。だが、これはさきに引用したエンゲルスの指摘どおりではないのだろうか。

しばしば「減量経済」だとか「安定成長路線」だとかといわれる。それは事実が証明しているように、労働者をクビ切ることである！

こうした傾向は電機だけではない。あらゆる産業におよんでいる。読者諸氏はおぼえておられるであろう。八月二〇日付の『朝日新聞』の記事を。そこにはこうあった。

「新日鉄が大合理化計画—— 庄延まで操短拡大、数千人削減めざす」

昭和二八年、日本の粗鋼生産高は七六〇万トンであった。二〇年後の昭和四八年、それは一億一、〇〇〇万トン以上ものぼった。じつに一五〇〇％もの高成長をとげたのである。そして今日、新日鉄、鋼管、住金、川崎製鉄、神戸製鋼の鉄鋼独占は、一億五、〇〇〇万トンにもものぼる生産能力をもつにいたっている。ところが、生産高は一億トンにすぎぬ。四、〇〇〇万トン以上の生産手段が遊んでいる。

新日鉄に例をとれば、「四千六百万トン余の設備を持っているのに、三千三百万トン程度しか生産しておらず、三割ダウンの七割操業を続けている。二十六本ある高炉のうち十本を休止して生産調整中だ」（同上『朝日』）という。

ところが、まだこれでもたりぬというのだ。第一次案では、高炉をさらに四本とめることが計画されたという。これでは、社会的影響が多きすぎるからであるが、「大型ミル（庄延工場）は八基のうち三基、線材ミル五基のうち一基、厚板ミル四基のうち一基、をそれぞれ休止」する、第二次案がまとめられたとのことだ。

朝日はさらに次のように報じている。

「これらの合理化による余剰人員については首脳陣は口をつぐんでいるが、少なくとも三千人、将来は従業員の二割近い六千人程度と推定する人もいる。ただし、会社側はこの人員合理化を自然減と配置転換によって処理したいとしている。経営陣としては、労組が人事大会を終える九月下旬以降に組合側に提示したい、としている」。

これが、電機や鉄、そしてすべての産業における「合理化」の実態である。

（木村一夫）

## キューバの社会主義

—— 第十一回世界青年学生祭典報告(二) ——

さきに政治プログラムを紹介したが(『社会通信』第三二号)、これに参加した仲間たちの感想文から一〇二記載したい。

「政治討論センターI(失業について)に参加し、初めて世界祭典に参加したという実感がもてた。各国から不況の原因と不況をどう克服するかということについて報告された。

一番感じたことは、社会主義国はわれわれの国にある不況、インフレ、首切りは資本主義国がもつ業病である、それをなくすには社会変革、経済変革がなければならないとマルクス経済学の学習をもとにして分析しているのにくらべ、資本主義国側で、それを明確ににいているのは一〇二ヶ国しかなかったことは、少し残念であった。

二番目に感じたことは、社会保障が進んでいるというスエーデンにおいても合理化が進み、青年労働者が首を切られ犯罪に走っている実態が報告されたことである。そして不況がくるのは「労働者の賃金が高く、社会制度が充実しているからだ」と、資本家は攻撃をかけてきている報告もされた。各国の報告を聞いて社会主義国の優位性ということを実感として感じることができた」(M氏)。

筆者の追記になるが、この常設政治センターでは、集約文書を討論する段階で、社会主義国は、不況の不可避性を一貫して主張、反対にイタリア、フランスなどは不況が資本主義の不可避性でなく政策の失敗であることを主張。意見が対立、結局、総括文書は、発言事実の羅列に終わったと伝えられている。

また、「ヨーロッパその他世界の地域の平和・デタント・安全・協力のために戦う青年学生」(第一分科会)の感想文は、興味をひく。

「発言は、社会主義国が中心。資本主義ではフランス、イギリスが発言。社会主義国からだされた意見は共通している。①デタント、軍縮にたいして、ソビエトが果たした役割は大きい、②ヘルシンキ決議を軍縮の中心におき、青年がその運動の中心を担う、③軍事費を生活向上のためにつかうよう運動をつくる、④軍縮、デタントのたたかいは国内のたたかいから国際的なつながりをもったたたかいへと広げる、というものである。ただユーゴは若干異った意見、非同盟諸国との連帯を強調し、超大国(たぶんソビエト)という表現をつかう。感想としては、具体的な青年労働者のたたかいというより、路線での発言の面が強かった。そのなかでユーゴの発言は「非同盟会議」の動きのなかで路線の違いがはっきりしてきている」(S氏)。

蛇足になるが、ルーマニアも、両軍事ブロック(ワルシャワ条約軍とNATO軍)の同時解体論を打ち出しているのが特徴である、ヘルシンキ宣言は不満足と言ってはばからぬいし大国支配の排除をうたっている。「世界各地で、帝国主義とネオファシズムに直面して、人は中立的な立場に立つことなどはできない」(フィデルのサンチアゴ・デ・クーバ

における演説)と非同盟運動の方向について打ち出していると比較するのもおもしろい。なお、第十一回世界祭典の特徴点として、記憶にとどめて置きたいのは、社会民主主義政党の青年政治同盟がはじめてIPCにはいったことである(国際社青同とでも言うのか?)。どんな波乱をIPC内に巻き起こしたか、つぎのようなことがあった。

閉会式のあいさつをめぐり、「社民」の青年組織が、「われわれにもあいさつをさせよ」と要求し紛糾、結局、世界民青連のあいさつをやめることによって妥協が成立したことである。私たちは「社民」たちの横槍に怒りを押えることができなかった。

## 二

つぎに、キューバ共産党およびキューバ人民の世界観とも言うべき考え方を、フィデル・カストロの演説とわれわれの七回におよぶ講演を引き受けたロマン・ロベス氏(ハバナ大学政治経済学教授)の報告をもとにして述べたい。

まず国際情勢についてである。サンチアゴ・デ・クーバの演説で、「皆殺し、拷問、悪らつな手段を用いて、世界の進歩的指導者たち、人民の運動を抹殺している」ということをのべたさい、人間性はもっと尊厳に扱わなければならないと指摘し、国際社会において、戦争に加担する一つの潮流を帝国主義者は作り出していると指摘。この事態に直面して、これを許したり、進めようとしている者を前にして、人は中立的な立場に立つことなどとはできないと述べている。

また、プロレタリア国際主義に言及してつぎのように指摘した。たゆまないソ連の援助についてふれ、「国際主義者になるということは、人間性というものについての借りをかえず一方法であると述べ、中国は帝国主義と共謀し、もっとも反動的なまくろみのなかで帝国主義者に手を借し、彼らとともに働いている」。中国にたいする批判はラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジアを問わず多かった。中国はチリのピノチエト軍事政権を支持する唯一の国であり、ヨーロッパではNATOを認めると言い、日本では日米安保条約容認、これでは孤児になるのがあたりまえ。集会で知り合ったブラジル共青(非合法)と話したところによると、ラテンアメリカの毛主義は壊滅したと私に言った。

またキューバは「軍隊の国」であると考えている若者にたいして、「キューバで今年卒業して教師や教授になったものは、キューバの軍隊から将校になったものより二〇倍も多いのだ、しかし、一人ひとりのキューバ人にとっては兵士や将校になることは偉大な名誉であるという事実もつけ加えよう」。そして中国の敵対行為の危険に脅かされているベトナムとの連帯を強調している。

非同盟運動についてふれたさいに、「非同盟運動は、バラバラになつてはならない。反帝、反植民地、反ファシズムでなくてはならない」と進むべき方向を示した。ロマン・ロベス氏の講演では、①中国の指導部はマルクス・レーニン主義に敵対している、②中国の外交政策の変質は、当然にも内政面、生産関係の変質を呼び起すのではないか……などの説明を加えたのち、最近の世界情勢のなかで、ユーロコミュニズムが台頭しはじめている。今祭典のセンターでの討論のなかでもいろいろな意見がでてしていると、①マルクス・レーニン主義の修正である。それは革命的实践を抜くことになる。いわゆるプロレタリア独裁を認



めないものである、②革命的な権力の移行を否定する。ブルジョア議事を認め、そのなかで社会体制を変えようというねらいを持っている。暴力の悪を否定することは、ブルジョア思想にのめりこみ結局は革命を否定することになる、③、①とも関連するが、社会主義体制になって他の政党をも認める。また、ブルジョアのマスメディアを否定しない。つまりイデオロギーの変革を必要としない思想である、④彼らは誤った思想である。いろんな党の混合形式を認めている。つまり、プロ独をどうとらえるのか、民主主義の概念をどうとらえるのが理解されていない。⑤また彼らはソビエトとアメリカ帝国主義とを同一視しているところに問題がある、まさしく古くからのブルジョア思想の潮流と言え、と指摘している。

また、日本国内で連日、キャンペーンがくり広げられている、反社会主義宣伝（キューバはアフリカに軍隊を送っている。キューバには人間の自由がない）について質問した。これにたいして「アンゴラ人民は米軍と真向うからたたかいました、しかし、アンゴラは国情不安定のなかで真の独立達成のために、キューバ、そしてソ連に支援要請があり、われわれは国境を越え、社会主義連帯の立場で、アンゴラ人民解放のために支援しました。キューバ人民は、任意でたたかいに参加し、無報酬で希望しました。そして勝利しました。しかし、まだアンゴラの国情は不安定であり、今もずっと連帯しています」と述べ、さらに「キューバ兵はたたかいただけでなく、医療、福祉、学校の教師として活躍している、むしろ重点はここにある、みなさんからの要請があれば、いつでも支援する」という決意を披露しわれわれを驚かせた。

## 三

ビバ・フェステバル、ビバ・クーバと掛け合う声のなかに、キューバの不敵な心がぞいている。ある中年のひとの会話である。

「アメリカとどれくらい離れているか、90マイルだ。アではアメリカは見えるか、アいやブロックされていてみえない!!。(このキューバ人の心意気をみよ!!。まだあった。アキューバ共青の組織率と人員を教えてください、ア私は責任者じゃないので詳しくはわからない。(一)三人が同様の答をした。しかしアキラメズに四人目の人にたずねた)アCIAが目光らしているから教えるわけにはいかない。……私は自分の愚かしい質問を恥じた。同時にいやが上にも緊急を感じざるをえなかった。

われわれはアメリカ帝国主義の裏庭にいたんだ、革命後一九九年、巨象の前にたちふさがる中南米唯一の社会主義国キューバ、われわれは世界の青年学生とともに、世界史の舞台が確実に歩みつづけていることを感じたのである。

(引用文は、現地で発行された、「世界祭典ニュース」、「キューバの声」を使用させていただいた・広田和郎)

## ◇ 投稿 ◇

## 百万党『構想』を考える

## 『構想』の発想に問題

「百万党建設の基本構想」という提案は、全国各県で討論されていますが、私の知るかぎりでは否定的にあるいは疑問が続発する形で受けとめられていると思います。

広島県本部では、七月一五日拡大県委員会という形で討論されましたが、積極的な賛成意見はなく、反対意見が続出しました。とくに印象深かったのは、ある古参党員の発言でした。

「入党後数十年間、職場や地域で血みどろなたたかいをやってきた。それだけに少々のことでは党をやめられない、という気持がある。だがこの提案をみてはじめて、"やめようか"という気がしてきた。総支部で討論してもみんなそういつている。"今までなんのためにやってきたのか"とガックリしている。"なぜ党員が増えないか"の『構想』の発想に疑問がある。自分の総支部では本部の三〇万党提起をうけて党勢拡大を取り組み、十万を達成し二〇万に近づいている。だが党員が増えるにしがって一面問題も出てきている。職場のなかで党員が主流と反主流に分かれて対立しあうところも出ている。百万党の提起は思想統一が非常に軽視されている。だれが三〇万党の提起を読んで実践したのか、その総括が抜けている。本音とタテマエがちがう社会党だから今回もタテマエだけというならいいが、本気でこの方針をやるといふのなら淋しいが党をやめざるをえなくなってくる」

これは地方で党建設をすすめてきた同志の卒直な気持だと思えます。

## 「四〇カ月で党はなくなる」?!

『構想』は、だれでも自由に入党できない事情として「財政的な負担」「党員に課せられる活動諸条件を当人が障碍と感ずる」からとのべています。

無理な活動の押しつけというが、党の現実には党員をあまりにも「非活動」のままに放置し、「党費徴収」だけに終わっているのではないのでしょうか。その趣旨を質問すれば、担当中執は「年配党員に学習にビラまきを強要したという例を聞いている。自分の所属総支部にそんな例はないが」という返事。財政負担も楽ではないが、それをいうなら社青同や婦人会議の減免措置が廃止されたのはなぜでしょう（同盟員は、低賃金のなかから党費を上回るような同盟費をも同時に負担しているのですよ）といったくなります。

奈良で開かれた全国青年党員政治討論集会にも行きました。中執はあちこちで「毎月千人づつ党員が減っているから、このままでは四〇ヶ月で党はなくなってしまう」と言いま

わっておられる。そんなバカな?!

一、二の賛成者はいわく。「選挙の支援をよびかけても、こたえてくれるのは二、三の労組だけ。この現状から脱皮するには百万党しかない」。森永組織局長いわく、「労働組合にオンブにダッコで選挙している政党がほかにありますか、日本だけです。ほかに対案があつたら出してくれ!」

何をそんなにお困りなのでしょいか。

### 党内民主主義の実現?

私はこの提案を読んでいて、あちこちに「党内民主主義の実現」、「上から下への発想を転換し」という言葉に奇妙な感じをいだいています。

昨年二月の党大会で満場一致可決された方針が江田氏の離党騒ぎをきっかけに根底からゆらいでくる。「国会議員への代議員権付与」が「上部」から提起され、「下部」の反対意見は「これを認めなければ党が分裂する。理屈はともかくまじまれ」、「党改革案は一体のものだから部分的修正(代議員権)はゆるされない」と圧殺されました。九月全国大会に参加した県本選出の代議員は、採決のとき「反対だ!と手をあげた」と報告しています。それでも中央本部の見解は「満場一致可決した。それを今さらむしかえすのか」ということです。

「百万党」討論のもちかただつてそう思います。森永組織局長をはじめ各中執は「中期経済政策と百万党基本構想は一体のものとして討論してくれ」といわれます。ところが飛鳥田委員長は、地方党員の中期経済政策批判の声にたいして、「百万党と中期経済政策は別」と答えておられます。ある中執は「党建設委員会で十分討論された結果だ。文句があるなら対策を」と迫れば、ある中執は「中執で論議されたものではないから」と逃げられる。七月一日付討議資料には「過去の(党建設)の努力は、どちらかといえば党の前衛化をめざし、レーニンの組織論を理想として追求してきたといえる。このため、たえずこの理想と現実とのかい離になやみ、現実の労働運動をはじめとする大衆運動や党の実態にみあった組織建設の方策はついに成功しなかったように思われる」とあり、森永組織局長は「レーニン組織論はダメだ。これまでの党建設の方針では離党者を出すばかりだ」と言明されています。

あまりにも唐突なこの総括のうえに、「集団加入党員制度の採用は焦点的課題」「班長制度の採用」など党規約かわかる重大な問題が、党中央の見解として提起されてくる。こういう方法が党のめざす「民主主義の実現」なのでしょいか。

### 社会主義の否定のうへの党改革

商業紙でさえ、「日本社会党とは異質」だという、イギリス労働党をはじめヨーロッパの

社会民主党の歴史が党建設の参考資料とされています。

ドイツ社民党の概要では、「東ドイツと西ドイツの生活水準の格差、ソ連、東欧の社会主義の現実には西ドイツ国民に歓迎されず」「ゴードスベルク綱領でマルクス主義を放棄し……なんでも反対党から現実的な政党へ、階級政党から国民政党へと転換し党勢は上昇し、四〇年ぶりに政権についた」など、『日本における社会主義への道』にかかっている「社会主義の優位」という認識はみるかげもなくつがえされています。

森永組織局長は質問にこたえて「ソ連、中国、東欧など現代社会主義国に自由と民主主義がないのが問題だ」と力説されます。しかし、一方では『道』や『国民統一の基本綱領』を否定するものではない、ともいわれます。

中期経済政策ともなると「資源の制約条件への対応」「分権と自治」「自己決定と自主管理」など「新たな考え方」が飛びかい、『道』や『統一綱領』などで得た既存の社会主義の知識（社会主義の必然性、労働者階級の主導性、民主集中制）の範囲では理解できません。「社会主義の構想」（参考文献）は「現状の社会主義（スターリニズム）よりは現代資本主義の方がましだ」という意見が紹介され、「社会主義像の転換」が強調されています。「中央集権指令型計画経済の破綻」「少数のテクノクラートの専一的管理……労働者や農民は指揮命令に従って労働する存在……労働力商品化はなくならない」等々、ブルジョアマスコミと見まがうばかりの社会主義への悪罵が投げつけられ、それを克服するという「社会主義像」は、またしても「自主管理」と「自己決定」という言葉のくりかえしです。脱党された故江田氏や社民連の主張とそっくりの内容です。

いったいなんのためにこのような提起がなされたのか。私は卒直にいつて、日本社会党の否定であり、新たな社会民主党への質的転換の意図があると思います。

「百万党の実現」のためには「十全な社会主義者だけで自由と民主主義・社会主義をのぞみ、保守政治と決別して革新を求める人々にも入党を」ということになり、「党費軽減、集団加入党员」「集団加入党员の権利・義務は個人加入党员とかわりない」と展開されています。財政負担や党员活動は現在の党友などとあまり変らないとすれば、なぜ「百万の党员」にこだわるのか。それは「党そのものの変質」に目的があるとしたか考えられないのです。すがいかででしょうか。

### ■増刊号好評発売中■

社会党『中期経済政策（第一次試案）』批判の決定版！

定価 四〇〇円

## ■ マルクス・レーニン主義とは何か ② ■

# 日本社会党の性格と任務

—— 日本革命と社会党(四) ——

社会主義者の任務は階級意識を高めることだ

樹徳 『共産党宣言』に、「プロレタリア階級は、さまざまの発展段階を経過する。ブルジョア階級に対するかれらの闘争は、かれらの存在とともににはじまる」(岩波文庫版、五〇頁)とのくだりがある。ここでマルクスがいつているのは、労働者階級の意識の発展だ。

したがって、マルクスはつづいて、「あらゆる階級闘争は政治闘争である。……こうしてプロレタリアは階級へ、したがってまた政党へ組織される」(同、五一―五二頁)とのべ、労働者階級が階級に組織されていくこと、政党に組織されていくといっている。このことをぬきにして、「百万党」をつくれといっていない。あたりまえのはなしだけどね(笑)。

山口 「百万党建設の構想」では、マルクスの考え方は迷惑だという。

樹徳 つまり、社会主義者の目的とか任務とかがぜんぜんない、わかっていないということだ。

山口 そうです。ぜんぜんわかっていない。

南 だけど、「構想」の執筆者たちは、わかっているんでしょう(笑)。

加藤 科学的社会主義はだめだということがね(笑)。

樹徳 今の社会党に共産主義との言葉を使えばお叱りうけるかもしれないが、同じ『共産党宣言』で「共産主義者の当面の目的は、……階級へのプロレタリア階級の形成」だといっている。「構想」にはこうした視点がぜんぜんない。

鈴木 そうした視点を社会党からなくそうということでしょうね。抹殺しようとしていることが最大の問題ですね。

樹徳 階級の階級への形式、このことぬきに社会主義者が社会主義者であることはできません。

司会 それがたいへんなことだ(笑)。

樹徳 でも抽象的にいえばそのことにつぎるんじゃないの?(笑)。

理論と実践の弁証法的統一ということ

南 今年の春闘で民間の仲間のたたかいは、ずいぶん私たち公労協・公務員労働者と関

係あるんだなど、仲間と議論した。労働運動をやりだして七年くらいになるが、ようやく全体のことが視野に入るようになるんだよね。理論的にはいろんな本で学んでるんだけど、じっさいの運動のなかで個々の運動がどれほど重要で密接な関係をもっているかが徐々にわかってくる。階級的な視野をもつということはじつにたいへんなことだ。

司会 一言でいえば理論と実践の弁証法ということ？

松井 そうです。

南 「党風確立の基本的諸問題」に――

「わが社会党員は、理論の『武器』をもって、十分に武装することを忘れてはならない。このことによつてはじめて、社会党員は、日常の事務のなかに、革命の精神を見出すことができる。理論と実践の統一ということも、要するに、個々の実践活動のなかにより一般的な本質的なものを発見し、これをさらにより高い実践にむすびつけていくことにほかならない。たとえばある工場における労働者の闘争のなかに、その工場労働者のみの利害に関して、他の工場、したがってまたその全産業の労働者の利害と相反するような利己的な要求があるとしても、その工場労働者がその工場の資本家にたいしてたたかう要求と精力のなかに、全産業労働者の、さらには全労働者階級の要求に集約され、全労働者階級の精力に集中するものもふくんでいる。これを区別して、後者の成長に力をつくすことは、われわれの理論を身につけた者にしてはじめて可能である」(向坂逸郎著『日本革命と社会党』、一〇六―一〇七頁)。

とあります。ここにすべてがいろいろとされています。

樹徳 社会主義者とは何か、社会党員とは何かということがね。

司会 つづいて次のようにものべられているでしょう。

「ある工場の労働者だけの利害、または労働者の一時的の利害だけに関する要求がなされる。しかし、局部的、一時的にせよ、労働者が個々の資本家や資本家にたいして要求をかかげてたちあがったことには、より高い意味がふくまれている。この局部的、一時的な利害を、労働者階級の一般的、恒久的な利害とむすびつけて理解し、このなかにあって、一般的、恒久的利害の方向に動かしていきうる者は、理論を身につけた政治的指導者である。これがまさに理論と実践との統一である」(同、一〇七頁)。

たいへん味わい深い指摘です。

松井 味わい深いだけじゃないよ。マルクス、エンゲルス、レーニンのいっているとおりだ。

学習なくして社会主義運動の成長はない

樹徳 日常闘争のなかにふくまれている歴史の意味を知るもの、それが科学的社会主義者だということですね。

松井 そうです。日常闘争のなかにある直接的で複雑な、なまの経験のなかにかならずある本質的なもの、社会主義の意識につながるものをつかみだし、これを労働者階級の成長に資することができるのは、理論の力だ。だから、学習なくして社会主義運動の成長はありません。

山口 学習を忘れるとたんなる「事務屋」になり、「官僚主義」が発生する？

松井 そうです。

司会 向坂逸郎氏は同じ論文でこういっています。

「革命への道が……長く曲りくねっているために、われわれの隊列のあいだに目的地を見失う者もできてくる。日常の事務のなかに埋没して、この事務そのもののほかに労働者階級の運動はないかのように思いこんでしまう者がでてくる。日常の事務が自己目的となる。ここに官僚主義や日和見主義や改良主義の土壌がある。このようにして、革命について語ることは、青くさい青年のたわごとであると考える『大人』が生まれてくる。『大人』にとっては、日常の『具体的政策』のみが必要であって、革命の理論などは無用になる。この『大人』たちには、このようにして社会主義政党の根本的な存在理由は忘れ去られる。彼らは社会主義者ではなくなる」(同、一〇三〜一〇四頁)。

松井 そのとおりだ。

歴史は思うがままにつくれない

樹徳 もう一つ理論的に重要なことがあるでしょう。

山口 一般の危機ということと特殊の危機、それとの主体的条件の関連のことですか？

樹徳 いつでも革命がおこせるわけじゃないからね。客観的条件が規定的です。

司会 同じ論文で「われわれは、いついかなるところでも、『革命』に直面しているわけではない。世界の政治経済の情勢は、一般の危機の状態にあるといっているのではない。現にいまわれわれは、日本で直接的に特殊に革命的な情勢に直面しているのではない」(同、一〇三頁)とのべられているところですね。

樹徳 そうです。

松井 一般の危機と特殊の危機の概念はひじょうに重要です。マルクス、エンゲルス、レーニンはつねにこのことを考えています。

樹徳 このことを忘れると権左冒険主義と日和見主義のあいだを行ったり来たり(笑)することになる。

松井 そうです。ほんとうの社会主義者ではありません。

「中期経済政策」と「百万党構想」は一体

樹徳 ですから『百万党建設の基本構想』をつらぬく考え方では、さきに山口さんがい

つてたけれど、それでは社会主義が科学ではなく空想になる。

山口 その一つのあらわれが「中期経済政策（第一次試案）」、とりわけ第四章にわたる「社会主義の構想」です。

樹徳 「中期経済政策」は空想的社会主義だ。

司会 マルサスなみのね（笑）。

山口 理論が「中期経済政策」にあり、組織論が「百万党建設の基本構想」です。ですから、この二つの文書はメダルの裏と表の関係です。

加藤 「百万党」の問題についてはこういう意見もききます。「黨員がふえるということはいいことだろう」と。

南 それじたいはね。

加藤 そういう自然な要求にのっている。つまり、一所懸命黨員をふやす努力をしている人にとっては、少しくらい社会主義の意識が低くてもいいじゃないか。黨員にしてから教育し合えばとね。そうした考え方が素朴にあるのではないですか。

樹徳 理論をやさしく説くことと理論の水準を下げることはちがうからね。最近の傾向は、理論の水準を下げ、科学的社会主義の党、労働者階級の党でなくしてしまおうということでしょう。市民レベルまで下げようというわけでしょうから。

南 だから、なんどもくり返すことになるんだけど、社会黨員とは、あるいは社会党の性格とは何かを再度、根本にかえて考えてみる必要がある。社会党の性格と任務はほんとうにデッカイものだし、今の社会党は、その性格と任務をみずからのものとするためにあえぎながら登っている。こういう状況ですからね。

加藤 社会黨員の任務についてはすでに討論されています。ですから社会党の性格に焦点をあててみたらどうでしょうか。

### 社会党は階級闘争の政党

南 基本的には『日本革命と社会党』の一〇頁から明らかにすね。

樹徳 いま南さんが「基本的には」とのべられたが、そのところが重要だ（笑）。

松井 そうです。何度強調してもしすぎることはありません。じっさい社会党は書いたり言ったりしたりすることをすぐに忘れてしまうところがありますから（笑）。

加藤 社会党は階級闘争の政党であること、これが第一に指摘されなければならない？

樹徳 「国民党」というのと根本的にちがう。

司会 社会主義政党がなぜ「階級政党」といい、国民のわずか六%くらいの人びとに立脚している自民党が「国民党」といわざるをえないかということですね。これについて、同じ論文で次のようにのべられています。

「社会主義政党が国民党と規定されたら、自民党との区別はなくなる。自民党は国



民政党と名のついている。国民党というからには、階級対立を否定する。したがって、その政党の党员には、資本家も労働者も差別なくはいることができる。資本家階級と仲よくはいる社会主義政党などというものはない。

自民党には労働者はいらない。自民党が資本家、ことに独占資本家の政党であることは、あまりにはつきりしているからである。自民党は日本の人口のきわめて小部分を占めている独占資本の利害を代表する政党であるから、逆に国民党と名のらなければならぬ。その恥部をかくすいちじくの葉が必要となるからである。労働者階級の政党は、労働者階級を中核として、農民、小経営者などの独占資本から搾取されている勤労者の利害を代表する政党であるから、国民の圧倒的多数の土台にたつものである。その正体を知られて恥じなければならぬところはどこにもない。堂々と階級闘争の政党であることを名のらなければならぬ。われわれが、自民党とともに国民党と名のなるならば、労働者その他の働く階級に、その階級的利害のためにたたかうべき方向を見失わせることとなる。これほど社会主義の実現を阻止する政党はない。

われわれの政党が階級闘争の政党であることを全国民の前にあきらかにするのは、この闘争をつうじてのみ階級対立を除去することができるからである。社会主義社会の実現によつてはじめて階級のない『国民』が生まれる。われわれが階級政党として階級闘争をおこなうのは、じつに階級対立そのものを除去するためである。自民党が国民党と名のるのは、働く階級の搾取される現実をごまかすことによつて、階級対立をいつまでも存続させるためである」(同、一一一―一二頁)。

こうして、国民党論は、社会党の闘争力をびっこにするものだといえるわけです。

### 社会党が全力を集中すべき点は何か

司会 第二にこれと関連する議論として社会党を大きく強くするためにどこに力を集中するのかという問題がありますね。

山口 農民も漁民も、インテリもそして中小零細企業もふくめた幅広い党という議論ですね。これがある。

樹徳 ありとあらゆる階級・階層―独占資本家はもちろん除くけれども―を広く強く結集するのはあたりまえだ。しかし、そのばあいだれが社会主義革命の歴史的任務を遂行するかだ。労働者階級だ。その他の階級および階層にはその能力がない。だから労働者階級を組織してそのまわりにできるだけ多くの人びとを結集する。このことがポケてしまつて、どの階級もどの階層も平等にあつかわれる、ここに最大の問題がある。

南 『社会通信』第八号でしたか、一九七五年の階級構成が明らかにされていましたね。それによると就業労働者の六九・五%、約七〇%が労働者階級です。農民や漁民のなには半プロレタリア的な人たちがたくさんいるわけだから、七〇%をこえる人たちが労働

働者階級といえます。このことを忘れて社会党の発展はありませんよね。

司会 労働者階級が国民のなかで圧倒的多数を占めていることにもっとも恐怖しているのは独占資本家たちです。日経連は毎年「賃金問題研究会報告」や「日本の労働経済情勢」など、彼らの側からの階級分析をなしそれを指針としていますが、「職場の安定帯論」などそのさいたるものでしょう。だが、職場の問題をもっとも階級的に考えているかといえば、独占資本の連中です。

松井 独占資本家どもは政治的に考えていますからね。

司会 とすれば、われわれの力がどこに集中されなければならないかは明らかです。

加藤 社会党を働く階級の先頭にたたせることしかない、ということですね。この問題についても「党風確立の基本的諸問題」で発言されています。

司会 一一六頁から一一七頁にかけてがそうです。ちょっと読みあげてみますと――

「当面、どこに主力を注ぐべきであろうかということが、われわれの問題である。われわれの努力の主要方向は、近代的労働者階級、とくに大産業の労働者のなかに多数の党員を育てあげることにある。社会党の強化の原動力は、当面、独占的大企業の労働者のなかに、誠実で有能で勇敢な党員を獲得することにある。そしてそれらの党員がもっともすぐれた組合員として各大産業の組合のなかで活動することによって、労働組合と社会党との有機的な結合が生まれる。このことによって中小企業の組合員、その他未組織の労働者を獲得することができる。労農、労商共闘も、このようにして可能になる。このことは、いうまでもなく大企業の労働者と中小企業の労働者との組織いずれに当面の努力を集中するかという問題であって、その間は中小企業の労働者を放っておくということを意味するものではない」（同、一一六―一一七頁）。

こんにち、資本主義の一般的危機の深化と相まって、じつにさまざまな矛盾があらわれ労働者・勤労大衆を苦しめています。その結果として、労働者階級の搾取に反対するたたいもたいへんひろがりをもつようになっています。ただ地域住民をたたかに組織し、一定の成果をあげているところは、その中心に組織された労働者がいるところでしょう。

南 そうです。労働者階級の階級への形成の度合いと相まって、さまざまなたたかいが組織されているのが実態です。

樹徳 「地域住民」といっても、その圧倒的多数は労働者階級じゃないか。そうでしょう。

( つづく )